

スティーヴン・クレイン「怪物」における人種と暴力
ーウィラ・キャザー『サファイラと奴隷娘』との比較からー

米 山 正 文

Race and Violence in Stephen Crane's 'The Monster'

YONEYAMA Masafumi

『宇都宮大学国際学部研究論集』（ISSN1342-0364）第48号（2019年9月）抜刷

JOURNAL OF THE SCHOOL OF INTERNATIONAL STUDIES
UTSUNOMIYA UNIVERSITY, No.48 (September 2019)

スティーヴン・クレイン「怪物」における人種と暴力

ーウィラ・キャザー『サファイラと奴隷娘』との比較からー

米 山 正 文

1. はじめに

スティーヴン・クレイン (Stephen Crane) の短編小説「怪物」(『The Monster』, 1898) は、火事から息子を救った黒人召使いをめぐる白人医師の苦悩の物語である。この火事による火傷が原因で、召使いは「怪物」のような容貌になり、町を恐怖に陥れる。「怪物」を町から追放しようとする町の人々と、息子の命の恩人である召使いへの義理との間で、白人医師は苦悩する。徐々に医師に圧力をかけて行く町の人々と、追い詰められる医師の葛藤とを、クレインは非情な筆致でリアリティックに描いている¹。

町の人々が追放しようとする「怪物」が黒人であることから、このテキストにおける「人種」の扱いに批評家は当初から注目してきた。しかし、作品の主人公があくまで医師トレスコット (Trescott) であり、徐々に村八分にされていくトレスコットの苦悩が中心に描かれているため、批評家の間では社会諷刺が作品のテーマであると見なされてきた。すなわち、召使いのヘンリー (Henry) だけでなく、ヘンリーを守ろうとするトレスコットをも村八分にする町 (いわゆる small town) へのクレインの批判が論じられてきた。たとえば、チェスター・ウォルフォードは、「共同体というものは、あまりにも容易に暴徒 (mob) 化してしまう」ことをクレインは示唆し、この物語は「黒人の置かれた社会状況を酷評していると同時に、より重要なことだが……、場所と時代を問わず、あらゆる共同体、あらゆる社会に対する酷評でもある」と述べ、共同体の持つ普遍的特質へのクレインのニヒリズムを主張している²。

日本におけるクレイン研究の碩学久我俊二も短編「怪物」について以下のように述べている。

ヘンリーが黒人であり、彼が迫害を受ける点に、「黒人への迫害」という象徴的意味を求めることや、またクレインの黒人に対する理解、同情を「期待」するのは、多分誤りであろう。テーマは、単にそういうレベルではなく、人間が取るべき責任という問題に及んでいる。……「怪物」を読んで、ある意味居心地が悪いのは、要は人間の持つ根源的な「偏見」、あるいはそれに伴う恐怖感を作品が暴露して突きつけたからではないか。……「怪物」では、たとえこの田舎町から逃げても、人間の本質的偏見にはかわらないのでは、そしてそれはいつの時代でも——この「怪物」でも若い世代のジミーまでもが、ヘンリーを怖いもの見たさ、度胸試しの慰み者にして、平然と言いつくをする——そうではないかという普遍性、閉塞感がこの町には与えられている³。

このように、久我は、「黒人への迫害」というテーマを否定し、奇形を恐れる町の人々の「偏見」(＝人間の普遍的特質) がテーマであると解釈するのである。

「怪物」における作者の意図を探ろうとすると、こうした読みはおそらく妥当であろう。しかし、怪物になるのが白人ではなく黒人であること、また、この小説が歴史的に見て、人種隔離を合法化した、いわゆる「プレッシー判決」(1896) の時代に出たことから、作者の意図と関わりなく、人種という観点でこのテキストを分析することはなお重要であると考えられる。この「人種」というテーマに注目した先駆的な論考が、ジョン・クーリーのものである。クーリーは、火事と、その後のヘンリーの顔の損傷は、「とりわけアメリカ黒人が被っている数々の不当な扱い」を象徴していると解釈する。また、クレインは物語の当初

からヘンリーを人間的に描こうとしながら、火事以降はただ「怪物」として描き、その個性や人間性を描くことはなくなった、それどころか、ヘンリーを含む黒人の登場人物をみな minstrel・ショー的な滑稽な人物、典型的な黒人ステレオタイプで描くようになったと述べる。そして、作品の中心をヘンリーからトレスコットに変え、困難に立ち向かう「善人」または「ヒーロー」としてトレスコットは描かれ、読者の共感はトレスコットに向かう。一方、ヘンリーはトレスコットの「引き立て役」となり、もはや内面も描かれない、仮面だけの怪物となって、読者が一体化することが全くできなくなる。(自然主義作家クレインは火事後のヘンリーをダーウィンの意味で「退化」したようにまで描く)。こうしてクレインは「悲しいまでに狭い人種意識」ゆえに、ヘンリーを人間的に描き切れなかった、とクーリーは論じている⁴。

クーリーの画期的な論考は、その後の、人種に注目した批評に大きな影響を与えた。まず、クーリーが述べていた、火事の場面の前後におけるクレインの変化について、この前後に関わりなく、クレインは一貫して黒人登場人物をステレオタイプの minstrel 芸人のように揶揄していると、クーリーの解釈を修正してきた。たとえば、ジョン・クレマンはクレインの他の作品も広範に吟味し、クレインが一貫して黒人登場人物を minstrel・ショー的に描写してきたことを実証し、クレインの黒人観を擁護しようとする初期の批評を事実上無効化している⁵。

プライス・マクマレイとクレマンは歴史的な観点からテキストを読み込み、ヘンリーを自宅に置くトレスコットは当時の白人慈善家を体現し、ヘンリーはそのまま死なせたら良かったと当初言い、後に町の有力者と一緒にヘンリーを施設に隔離することを勧めに来るヘーゲンソーブ判事 (Judge Hagenthorpe) は当時の科学的人種主義を体現していると解釈している。トレスコットとヘーゲンソーブ判事の議論は、黒人の扱いをめぐる当時対立していた二つの陣営を反映しており、クレインは後者の、ダーウィニズムに影響を受けた科学的人種主義の立場を擁護していると論じている⁶。

さらに、同じように歴史的観点から、当時横行していた黒人へのリンチという文脈からテキストを読み込む批評もある。マクマレイとエレイン・マーシャルは、ヘンリーを追放しようとする町の人々に、リンチを象徴的に読み込み、とりわけ「怪物」となったヘンリーが白人少女を脅かしていることを強調し、ここに「黒人男性＝野獣、性的脅威」という当時のステレオタイプの表れを見出している。すなわち、人種の雑婚 (miscegenation) の脅威から、町の人々はヘンリーをリンチ (= 追放) しようとしていると解釈するのである⁷。

最後に、クーリーが指摘していた、クレインの「失敗」、すなわちヘンリーを人間的に描こうとしながら結局ステレオタイプに従ったという「失敗」について、後の批評家はクーリーの論を追認しつつ、クレインの「限界」や「葛藤」と解釈してきた。クレマンは、火事のなかトレスコットの息子ジミー (Jimmie) を救おうとするヘンリーを勇者として描くクレインの筆致に注目する。そこに黒人の自由や独立への欲望を描こうとしながらも、結局は火事に「屈従」していくように描くクレインに、人種的ステレオタイプの影響 (「屈従」という「人種の本能」を黒人に内在化させるもの) を読み込んでいる⁸。マクマレイもこの「屈従」の描写に注目し、クレインはヘンリーを「奴隷性質」という「遺伝的特徴」から逃れられないものと描き、そこにクレインの自然主義的決定論を見出している⁹。マーシャルは、テキスト全体における、クレインの黒人への葛藤 (アンビヴァレンス) を指摘する。物語を通してクレインはヘンリーを「黒人」としてステレオタイプ化することと、「人間」として描くこととの間で揺れ動いている、それは作品の中心にヘンリーを置いたり、逆に周縁化したりする揺れ、火事の場面でヘンリーを「人間化」したり、逆に人種決定論的に描いたりする揺れとも通じていると指摘し、それはクレインが黒人を人間的に描くときの困難を示していると述べる¹⁰。

このように、批評家たちはクーリーの解釈を発展させてきたが、なお、「怪物」における人種というテーマには議論の余地があると考えられる。クレインが人種的偏見に影響されていることは、クレマンの極めて実証的な分析によって、もはや

疑いの余地はない。さらにマーシャルの説得力ある分析によって、クレインの黒人への葛藤も疑問の余地はないように思われる。しかし、歴史的観点による批評において、「怪物」となったヘンリーの追放にリンチを見出す解釈には疑問の余地が残る。むしろ、火事と火傷（それに伴う知的障害も含め）という惨事に、黒人が被っている「数々の不当な扱い」を読み込むクーリーの論の方が説得力がある。実際、当時横行していたリンチが肉体に危害を加えるものであり、火も使用されたというのは周知の事実だからである。また、マクマレイとマーシャルは、ヘンリーが白人少女を脅かし、「人種間雑婚」の脅威となったためリンチの対象にされたと論じているが、ヘンリーが脅かすのは白人少女だけでなく白人少年もであり、人種を問わず大人たちもすべて含んでいる。集団によるリンチというイメージから離れれば、すなわち、「町の人々」対「ヘンリー」という対立図式から離れれば、火事という出来事そのものを、作者による黒人登場人物へのプロット上の暴力、すなわち作者が用意した「象徴的リンチ」と見ることも可能である。

以下、本論ではこの視点に立って、再度、ヘンリーが持つ共同体への「脅威」とは何なのか、それは他の白人登場人物とどのように関係しているのかを考察する。その際、クレインとも交流のあった別の作家、ウィラ・キャザー（Willa Cather）の中篇小説『サファイラと奴隷娘』（*Sapphira and the Slave Girl*, 1940）との比較も加える。両テキストは、先述した黒人の「脅威」に関して、同性間の競争という重要な点を共有しているからである。最終的に「怪物」というテキストは、黒人への葛藤は払拭できないまま、『サファイラと奴隷娘』と同じく人種隔離（segregation）を正当化するものであると論じる。

2. 黒人の脅威と象徴的リンチ

クーリーが指摘していた、火事の場면을契機に、物語の中心がヘンリーからトレスコットに移行したという点は、テキストから容易に読み取れる。それは一つには、物語の前半ではヘンリーの描写の方が多く、かつ彼の内面も描かれているからである。だが、もう一つには、物語は当初ジミーの

視点から語られ、ジミーの中ではトレスコットよりヘンリーの方が明らかに優位になっているからである。第1章でトレスコットとジミーが登場するが、庭園で機関車ごっこをするジミーが花壇のシャクヤクを折ってしまう。そのことを父親に告げようとするが、トレスコットは草刈機で几帳面に庭園の手入れをすることに没頭し、ジミーの呼び声に気づかない。ようやく気づいても、ジミーが「あっち！」と何度も折れた花を指差しても理解できずに何度も聞き返す。トレスコットは二度「眉間に皺を」寄せ、何のことかと問いただし、「あっち！」と言った後のジミーの沈黙を「完璧な丁寧さ」で「尊重」し、折れた花によりやく気づくと二度「熟考」し、今日はもう機関車ごっこはしない方がいいとだけ簡潔に告げる¹¹。この場面で読者に印象づけられるのは、ジミーとトレスコットの距離である。会話がなかなか成立しない様子は、2人の間で日頃から意思疎通がうまくできていないことを表している。また、ジミーは父親の「顔色を伺って」いるが、ジミーの目に映るトレスコットは知的だが、近寄りがたく、冷たい感じのする父親である。(191) 一緒に機関車ごっこをしてくれるような父親ではなく、庭園の手入れに熱心な父親なのである。

次の第2章では、ジミーはトレスコット家の馬丁ヘンリー・ジョンソンの厩を訪れる。ジミーの目にうつるヘンリーの姿は、トレスコットとは対照的である。ヘンリーは近づいてくるジミーを「兄弟のように」見つめる。語り手によれば、この2人は「仲良し（pals）」である。(192) 2人とも共通してトレスコットに叱られる存在であり、2人にとってトレスコットは「月」であり、トレスコットとの関係において2人は「言葉に表されないが完璧に」「同情」しあっている。(192) その一方、ヘンリーはトレスコットの文句を使いながら、ジミーに「教え諭す」こともある。しかし、ジミーはそれを嫌なものだと思わない。むしろ、「聖人となったヘンリー」に「尊敬の念」を抱く。(192) 馬丁ヘンリーが粗末な服を着ていても馬鹿にすることなく、馬を引くことができることを「崇高」なものとする。(193) ヘンリーもジミーに厩の仕事を見せることが大好きだが、それはいつもジミーが「畏敬の念」でいっぱいになるから

であり、馬具の磨き方や馬へのブラシの入れ方を説明するとジミーが自分に「憧れ」を持つからである。(193-194) この部分ではもちろん、作者によって「子供と同等」というステレオタイプの黒人像が提示され、「劣等」のヘンリーに対するジミーの無知な「尊敬」が皮肉られている。しかし、ジミーの視点に限っていえば、ヘンリーは共感しあえる兄弟であり友人であり、また従順になれる父親的存在でもある¹²。さらに、「崇高」な肉体労働をこなす professionalism を身につけた「憧れ」の男性ロールモデルにもなっていることが分かる。すなわち、ヘンリーは事実上、ジミーの父親になっており、トレスコットの地位を奪っているともいえるのである。

ヘンリーが男性ロールモデルになっていることと対照的に、トレスコットは女性的に描かれている。先に、ジミーとヘンリーにとってトレスコットは「月」になっていると述べたが（「月」は三度も言及される）、語り手はジミーがこの月の「月食の犠牲者」だと述べており、トレスコットは二人の心に陰を与える存在になっていることを暗示する。しかし同時に、「月」のイメージが伝統的・文化的に女性と結び付けられてきたこともまた明らかである。さらに、トレスコットが熱心に取り組んでいるのが庭園であり、折れた花のことでジミーを叱責するという場面は、トレスコットに女性的なイメージを与えている。すなわち、厩でたくましい仕事するヘンリーと、細かく庭園の世話をするトレスコットとが対比されているのである。

ヘンリーと男性性との結びつきは、物語の中でさらに強調されている。語り手によれば、ヘンリーは「非常に美男な黒人」であり、黒人が多く住む郊外で「一目置かれている人物」である。（語り手は、「一目置かれている」ことを強調するために、“a light,” “a weight,” “eminence” と類義語を並べている。）(192) さらに、第3章ではヘンリーが着飾って外出し、恋人ベラ・ファラガット（Bella Farragut）の家を訪れる様子が描かれるが、馬丁をしていたヘンリーの別の一面が読者に明らかになる。正装したヘンリーは「馬車を洗ったことのある男だとは誰も思わない」ような雰囲気になり、ヘンリー自身も「地位や富、他の必要な素養を身

につけた、物静かで育ちのよい紳士」になりきっている。(194) 町角で「野卑な」白人の一人にからかわれても「心を乱されることはなく」自分の方が優れているという密かな気持ちを笑いで表す。(195) 一方、床屋の中から外をのぞく白人たちも昼間と見違えたヘンリーに驚き、「イカしているじゃないか？」とか、「あれはプルマンカーの給仕か何かだ、どうしてヘンリー・ジョンソンであるものか」とか、「あれは間違いなくヘンリー・ジョンソンだ。そうだ、よく見せたいときはいつでもあんな格好をするのさ！あの男は町いちばんのめかし屋（dude）なんだ——誰でも知っているぜ」などと言いつつ。(196) ヘンリー自身もこうした驚きの反応を意識しており、こうした反応から「喜び」を得ている。それはいつも「自分をどう見せるかということに関心を持っている」からである。(196) そして、ベラの家を訪れると、紳士よろしく何度もお辞儀をし、「極めて丁寧な会話」を交わすが、こうしたヘンリーに恋人ベラも夢中である。(197) ヘンリーが courtship に出かけるこの場面は、批評家が既に指摘しているように、 minstrel・ショーの典型的ステレオタイプが使われており、作者の人種差別的な揶揄を示している¹³。しかし、この場面は同時に、トレスコット家で馬丁としてジミーと接していたヘンリーとは違い、男性としての色気や虚栄心、魅力を持ったヘンリーが読者に強く印象付けられる場面でもある。ヘンリーはトレスコット家で父親としての役割を担っているだけでなく、町で、そして黒人コミュニティで注目される「めかし屋」なのである。

こうした状況は、人種という観点からどのように解釈できるだろうか。ヘンリーという黒人が持つ、白人社会への潜在的な脅威を暗示していると考えられる。エレイン・マーシャルは火事前のヘンリーは白人にとって完全に「安全な」存在になっていると述べているが、家庭の中でトレスコットの地位を脅かしていること、黒人コミュニティでも傑出した存在であること、さらに白人男性にも注目される男性になっていることを見逃している¹⁴。ヘンリーが外出する場面では、ヘンリーをからかったり、ヘンリーに注目したりする白人男性たちがむしろヘンリーより野卑で愚かに描かれて

おり、ヘンリーも自分の方が優れていると思っている。それだけでなく、自分をどうみせるか（これはジミーに自分の仕事ぶりを見せる様子にも読み取れる）に衷心するヘンリーには、男性としての自負心や上昇志向を読み取ることができる。白人紳士を「真似」る黒人としてステレオタイプ化され茶化されているものの、ヘンリーは白人の地位に接近し、白人と同等になり、さらには追い越していく（その地位を奪っていく）潜在的な可能性を秘めている。こうしたヘンリーをいわば「去勢化」し、押さえ込む手段として、クレインは火事という出来事をプロットに入れ込む。すなわち、白人（男性）の地位を脅かす「危険な」黒人（男性）に、象徴的なリンチを加え、「安全」な存在にするのである。

その火事の場面でヘンリーはどのように描かれているだろうか。ここは黒人ヘンリーに対するクレインの葛藤が読み取れる場面である。語り手は読者がヘンリーに共感できるように心理リアリズムの手法を用い、火事の中で恐怖に襲われながらジミーを守ろうとするヘンリーの内面を忠実に描写する。しかし、破壊的な火から逃れることを諦めたヘンリーを、「屈従した（submitting）、祖先たちのゆえに屈従した、心の中で、この大火に対する極めて完璧な隷属状態（slavery）になったのである」と語り、ヘンリーが奴隷制という環境によって遺伝的に刷り込まれた「隷属性」に支配されているかのような描写をする。（204）批評家たちはこれを理由に、クレインが自然主義的・人種主義的決定論に移行したと解釈しているが、物語はさらに複雑に展開していることを見逃している¹⁵。興味深いことに、この場面の直後、寝室からトレスコットの実験室兼仕事場に繋がっている階段のことをヘンリーは思い出す。すなわち、火事から脱出できる可能性を思いつく。すると、「大火への屈従（submission）はすぐに消え去った。…ヘンリーはもはや炎に対する生き物（creature）ではなくなり、炎との闘いを恐れるようになったのだ」と描写される。（204）「生き物」という表現は自然主義的決定論を想起させるが、ここでクレインは、さきほど暗示された人種主義的な遺伝上の決定論を退け、「屈従」から脱することのできるヘンリーを創出するのである。そして、この

後ふたたび大火の中でのヘンリーの恐怖が心理リアリズムの手法で語られていく。すなわち、クレインは人種主義を拒絶し、ふたたびヘンリーを「人間化」するのである。

しかしながら、黒人登場人物へのクレインの葛藤は続き、最終的にヘンリーは「炎との闘い」に敗北することになる。奇妙なことに、いったん「人間化」した後、クレインはまた再びヘンリーを人種主義的に描き出す。実験室の中は「燃え盛る数々の花が咲く地方の庭園（garden）」のようであり、「すみれ色、深紅色、緑色、青色、橙色、紫色の炎が、花のように咲き誇っている」ようにヘンリーには見える。（205）恐怖にかられたヘンリーは「湿地〔南部の換喩〕の悲しさを含んだ、黒人特有の嘆き声（negro wail）」をあげる。（205）さらに、部屋の片隅で爆発音がすると、目の前に「妖精の淑女（fairy lady）のような、ほっそりした、揺れ動くサファイア色の物体」が現れ、ヘンリーの前に立ちはだかると、ヘンリーは叫び声を上げ、「喧嘩で、ヘンリーの人種（race）が見せるような、ひょいと屈みこむ姿勢」をとる。（205）しかし、「サファイア色の淑女」が「ワシ（eagles）よりもすばやく」、その爪でヘンリーを捕らえると、ヘンリーは前に傾き、仰向けに倒れこむ。（205）倒れたヘンリーの頭は机の脚もとにあり、机の上のビンの一つが破裂すると、その中から「ルビーのような赤色」の液体が流れ出し、傾いた「マホガニー」の机を伝って、ヘンリーの顔の上に「赤く熱した宝石のように」ぼたりぼたりと滴り落ちる。（205-206）この液体がヘンリーの火傷を引き起こし、ヘンリーを「顔のない怪物」にするのである。「黒人特有の嘆き声」や「ヘンリーの人種」への言及から、クレインは再度、ヘンリーを人種化したことが分かる。そして、「黒人化」された後で、ヘンリーは「炎の花園」の中の「サファイア色の淑女」という幻影的なものに打ち負かされるのである。

この実験室の場面はヘンリーの視点から、心理リアリズムの手法を使い、かつゴシック小説的にも描かれているため複雑である。しかし、部屋の様子、ヘンリーの見た幻影や破裂したビンからこぼれる薬品の描写から、ヘンリーを打ち負かしたものの正体が読み取れるはずである。まず、「庭

園」の比喩はもちろん因習的な聖書的イメージを喚起するが、それだけでなく第1章との関係からトレスコットが大切にしている庭園を想起させる。また、イメージとして現れる「サファイア」(=淑女)や「ルビー」(=液体)、そして実物の「マホガニー」(=机)はみな、高価なものである。つまり、庭園や、こうした鉱石の比喩、机の素材は、トレスコットの持つ富を象徴している。さらに、ヘンリーを「怪物」にするのは火事ではなくトレスコットの薬品であり、この薬品は「科学」(の力)を象徴している。最後に、「淑女(fairy lady)」であるが、ladyという語から富や社会的地位を連想させるとともに、fairyからfair(金髪)を連想させる。「ワシ」への言及は、アメリカの国鳥も連想させる。つまり、この「淑女」はアメリカ白人を想像させるはずである。こうして、この火事で見られる様々なイメージは、富や科学など白人の有する権力総体を暗示していると考えられる。

実は、科学と登場人物との関係は、物語の当初から示されている。第1章でトレスコットが草刈機(機械)を操っていたのに対し、第2章でヘンリーは馬を扱っている。すなわち、二人の対比は機械(科学)と動物(自然もしくは原始性)の対比として提示されていることが分かる。ジミーが「機関車ごっこ」をしていることから、ジミーもトレスコットと同様、科学(機械)の側にいることは明らかである。さらに、仕事を終えたトレスコットは馬車に乗って「葉巻」をふかしながら、「いま見てきたばかりの患者の病状が、征服した野獣のように、完全に自分に屈服したことを快く」思っている。(206) この描写では「葉巻」によってトレスコットの富が示されていると同時に、病氣(=野獣)を征服することができるトレスコットの医学(科学)の力が暗示されている。クレインは、火事という物理的な暴力(リンチ)だけでなく、富や科学という象徴的な暴力(白人の有する権力)が、黒人クレインを「征服」するというプロットを創造しているのである。

この二重の支配の結果はどのようなになったのだろうか。物語の当初に見られたトレスコットとヘンリーの立場は逆転する。家に着いたトレスコットに妻が「ジミーを助けて!」と叫ぶと、トレスコットは芝地に面した実験室のドアの錠前と門のそば

を蹴飛ばし、煙と炎の中に踏み込んでいき、ジミーを抱えだす。つまり、実際にジミーを救出することができるのはヘンリーではなく、父親トレスコットである。ヘンリーがまだ中にいることを知ると、今度はヘンリーを救出するため中に入ろうとして、周囲に抑えられる。トレスコットは「つかまえていた人々ともみ合いになり、自分にも彼らにも理解できないような、医学生時代に使っていたありとあらゆるひどい冒瀆的な言葉を吐いて、「立ち上がると実験室のドアへ向かって」行く。止める人々はトレスコットの抑えようとするが「トレスコットの非常に怖がって」いた。(207-208)

結局列車の制動手の若者が既にヘンリーを救出できていたのだが、この場面でのトレスコットは当初の女性的なイメージを振り払い、激しく、「男性的」で、自然主義的な意味で動物性・本能的なイメージを帯びている。さらに、後に、ジミーが仲間と一緒に「怪物」となったヘンリーに近づく度胸試しの遊びをする際、他の少年たちを追い返し、妻にジミーを呼ばせ、詰問をする。つまり、父親としての役割を果たすのである。このように、火事によってトレスコットは、それまでヘンリーが担っていた「男性性」や「動物性」、さらには「父性」を取り戻すことになるのである。

それに対して、ヘンリーは火事後、知的障害になり、あの薬品によって顔をひどく火傷し、「顔を失う」ことになる。批評家が既に指摘しているように、「顔を無くす」ことは、アイデンティティーや人間性、知性の喪失を意味している¹⁶。床屋での人々の噂話の場面で、1人の客が「皆が言うには、ジョンソンはこの世でいちばん恐ろしいものになっちゃったんだそうだ」と言うと、別の客が「何がそんなに恐ろしいんだ?」と尋ねる。それに対して床屋は「顔がねえからだよ!」と言う。尋ねた客は「顔がないだって!」「顔がなくてどうやってやっていけるんだ?」と驚く。(222) すなわち、「顔がない」ということが人々をもっとも恐怖に陥れていることが分かる。それは、ヘンリーに人間性や個性が見出せなくなっているからである。また、ヘンリーは火事後、トレスコットが金を払って匿わせていた黒人アレク・ウィリアムズ(Alek Williams)の家から抜け出し、以前のようにベラ・ファラゴットの家に courtship に

出かける。しかし、ベラはヘンリーを見ると戦慄し、叫び声を挙げながら這って逃げ出す。このことは、ヘンリーが男性としての機能も失ったことを暗示している。

クーリーは火事後のヘンリーについて、作者が内面を一切描かない、ただの「仮面」になったと指摘していたが、興味深いことに、火事後のヘンリーには、黒人へのステレオタイプのみが繰り返し付与されている¹⁷。先述したベラ宅訪問の場面で、慇懃にお辞儀を繰り返すヘンリーには、ミンストレル・ショーの「しゃれ男」のステレオタイプが極端な形で付与されている。また、トレスコットがヘンリーに、治療後アレクの家に行くことになったと告げると、知的障害のヘンリーは関係ないことを答えるが、「陽気な笑い (laugh)」で答えたり、「クスクス笑って (chuckled)」答え、「小石がごろごろ鳴るような笑い」をしたりする。(215) さらに、ジミーたちが度胸試しにヘンリーに近づく場面では、語り手は少年たちの視点を取り、「怪物は不気味な、一続きの黒人風のメロディー (negro melody) を低い声でささやくように歌った」と描写したり、「怪物」が顔を空に向け「宗教的な詠唱に合わせ一定のリズムで腕を振る」と、少年たちは「訳のわからない数々の仕草が重々しく謎めいていたので」釘付けになり、ヘンリーの「悲しげでゆっくりとした」「嘆くような声 (wail)」に後ずさりしたと描写したりする。(235, 238) (知能の低さや子供っぽさを暗示する)「笑い」や、「黒人風の宗教歌」やそれに伴う仕草、さらに「嘆くような声」など、黒人へのステレオタイプをすべて羅列しているような印象を与える。また、度胸試しの場面では、少年たちの視点から語られているとはいえ、ヘンリーは非日常的で非現実的な、何か異質な世界の住人のようなイメージにされている。こうしたステレオタイプの極端化は、作者がヘンリーから「顔」を奪った当然の帰結であると考えられる。人間性が奪われた結果、ヘンリーにはステレオタイプしか残らない。これによって、内面の見えないヘンリーはさらに疎遠化、疎外化され、非現実的で、この世のものとは思えない「他者性」を帯びることになるのである。

しかしながら、作者による「リンチ」によって、

ヘンリーはもうトレスコットや白人男性たちの地位を脅かす存在ではなくなり、「安全」な存在となる。ただ、巷に姿を現すと「怪物」として人々を恐怖に陥れるため、何か策が必要になる。それゆえ、物語の最後で、判事のほか、ジョン・トウェルヴ (John Twelve) ら町の有力者3人が、自宅にヘンリーを匿うトレスコットに、「クラレンス山の向こうにある役に立たない小さな農場」をヘンリーに与えたり、「公共の施設」へヘンリーを入れたりすることを助言するのである。(245-246)

彼らはトレスコットがこのことで、立派な医者としての生涯を台無しにすることを心配して、このような進言をしていると強調しているが、隔絶した「農場」や「施設」への排除と収容は、人種隔離の隠喩として読める。(同行しているヘーゲンソープ判事は「法」を象徴している)。トレスコットはこの申し出を断るが、その結果、最終章で妻グレイス (Grace) のお茶会に大多数が欠席するという、暗黙の村八分に追い込まれていく。

作者クレインがトウェルヴの立場にいるのか、それともトレスコットの立場にいるのかは判然としない。ただし、どちらにせよ確かなことは、田舎町への諷刺や、主人公の道徳的葛藤やヒロイズムといった、作品の大きなテーマのため、ヘンリーが利用されているということである。クレインは黒人登場人物を「安全」な存在にした後、主人公の位置も奪い、白人登場人物たちの心理ドラマを前景化し、かつ物語の展開に貢献する便利な道具としてヘンリーを利用している。そして、最終的に、追い詰められるトレスコット夫妻を描くことで物語を終え、隔離しか方法はないという印象を読者に残し、事実上人種隔離を正当化しているのである。

3. 『サファイラと奴隷娘』における暴力と排除

キャザーの『サファイラと奴隷娘』はクレインの「怪物」と少しも共通点がないように見える。それは時代や舞台設定がまったく異なるからである。「怪物」の舞台が19世紀末の北部ニューヨーク州の田舎町であるのに対し、『サファイラと奴隷娘』のそれは南北戦争前の南部ヴァージニア州の農場である。すなわち、前者は白人医師と黒人召使(馬丁)との関係を扱っているのに対し、後

者は奴隷制の下での白人主人と黒人奴隷とのそれを扱っている。奴隷制の有無が人種関係に大きな影響を及ぼすことは言うまでもない。それゆえ、安易に両テキストを同列に扱うことは危険であろう。筆者の調べた限り、両者の比較を試みた先行研究は皆無である。

しかし、同世代のこの作家たちの、この二つのテキストを比較すると、登場人物の関係やプロットにおいて、いくつかの興味深い共通点が見出せる。まず、「怪物」のトレスコットとヘンリーが競合関係にあったのと同じように、『サファイラと奴隷娘』の主人公の奴隷主人サファイラ・コルバート (Sapphira Colbert) とその奴隷ナンシー (Nancy) も、(少なくともサファイラの妄想の中では) 同性間の競合関係にあると考えられる。サファイラは両足に水腫を患い、車椅子の生活を余儀なくされている。サファイラを支えるのが、長年サファイラに仕える忠実な奴隷のティル (Till) とその娘ナンシーである。しかし、サファイラは若いナンシーが夫ヘンリー (Henry) の愛人になっているのではないかと疑い始める。そして、甥のマーティン (Martin) を使ってナンシーをレイプさせようと計略する。しかし、それに気づいたサファイラの娘レイチェル (Rachel) がナンシーを北部へ逃亡させようと計画する。(レイチェルは密かな奴隷制反対論者であった)。レイチェルの援助によってナンシーは無事北部へ逃亡することができ、最終的にカナダへ逃れることができる。こうして、サファイラにとって妻の地位を脅かす競合相手は消え去ることになる。

クレインの「怪物」ではトレスコットが「女性化」され、召使ヘンリーが「男性化」されていたが、『サファイラと奴隷娘』でも類似の対比が見られる。ジョウゼフ・アーゴウは『サファイラと奴隷娘』ではジェンダー差があいまいにされると述べ、次のように的確に指摘している。

サファイラは……伝統的に男系の (masculine) 立場を受け継いでいる。彼女はジェンダーを超越しており、財産所有者・農園経営者として登場している。男性奴隷所有者がしていたとされていること——奴隷を売買し、性的に虐待し、酷く罰するということ——を行い、罰も免れて

いる。……彼女の夫ヘンリーは、小説の中で女性化 (feminized) されている。彼は無能に見え、娘 [レイチェル] を助けるときもただ受け身にそうするだけであり、サファイラには、彼自身ではなく彼女こそが主人 (master) であることに気づかせるのである¹⁸。

アーゴウの指摘が正しいことは、サファイラとヘンリーの立場が伝統的なジェンダー関係の反対になっていることから容易に理解できる。二人の地位は等価ではなく、土地の所有者・奴隷の所有者はサファイラであり、ヘンリーはそれらの扱いに口出しできず、ただ地所の中にある製粉所で働くだけである。ヘンリーはサファイラより4歳年下という設定にもなっており、二人の性格も対照的である。サファイラが信仰に関心がないのに対し、ヘンリーは非常に信仰心が篤く、製粉所がかいがいしく働くナンシーを宗教的に理想化するほどである。娘レイチェルにとって母サファイラは気まぐれな権力を振るう権力者であり、非常に誇り高い人物である。それに対し、ヘンリーはナンシーが製粉所で飾ってくれた花に心動かされるような繊細な人物である。

サファイラとヘンリーの違いがもっともよく現れているのが、第8篇「暗い秋」で、レイチェルの娘が一人亡くなり、二人が今後のことを語る場面である。レイチェルを実家に呼び戻そうと提案し、自分のまもない死を冷静にほのめかすサファイラに、ヘンリーはただ彼女の両手に顔を埋め涙を流す。サファイラの、病気に立ち向かう「大胆な勇氣」や、若い頃から変わらない「恐れを知らず、独立心の強い」性格を感じ、「非情さ」と思っていたサファイラの「冷静さ」がいま彼女の「強さ (strength)」だったとヘンリーは思いなおす¹⁹。

ここは、作品の中で二人の会話が描かれる最後の場面であり、ヘンリーの妻への敬愛が表わされるクライマックスの場面であるが、サファイラに付与されている特質が、伝統的な男性性と結びついていることは明らかである。それに対し、車椅子のサファイラの前で跪き、涙を流す夫は「女性的」である。

さらに、サファイラの水腫が、彼女をますます「男性的」な立場にしている。製粉所で働く夫の

身の回りの世話はできず、それを行っているのはナンシーである。サファイラが夫にできることといえば、居間で一緒に食事をし、紅茶を入れ、会話をすることだけである。また、邸の家事を取り仕切っているのはいまやティルであり、ティルがいなければ家内労働は成り立たない。そればかりか、ティルはサファイラの着替えなど身の回りの世話もし母親的な役割まで担っている。サファイラが家内でできることといえば、奴隷に命令するなど、奴隷を統制することだけである。ヘンリーとの会話も所有する奴隷の話題を好む（しかし、奴隷制を嫌うヘンリーにはなじまない）。父親と同じように奴隷制を嫌う娘レイチェルとは疎遠になっており、また車椅子生活のためレイチェルの家まで頻繁に行くこともできない²⁰。こうして、サファイラは妻としての役割、家事を取り仕切る主婦としての役割、そして母親としての役割からますます疎外され、「奴隷主人」という男性的な立場にますます置かれるようになるのである。

こうしたサファイラと対照的なのがナンシーである。製粉所でヘンリーの部屋の世話をするナンシーは、「妻」のような役割を担っている。彼女の性格は無垢で従順であり、臆病で、かつ柔和である。奴隷仲間からかわれて泣いたり、マーティンのことでレイチェルの前で泣くなど、何度も涙を流す場面もある。また、もっとも繰り返し描かれる特質は家事労働の能力の高さである。ナンシーは12歳のときからヘンリーの部屋の整頓をしており、部屋の中のものは何一つ損傷したことはない。きちんとそれができているか、熟練のティルがある日その部屋のベッドや洗面器、戸棚を厳しく点検しても、「自分でもここまで良く管理することはできない」と思う。(811) ヘンリーもナンシー以外の奴隷が部屋の世話をするのを嫌う。ナンシーは「物静かで仕事も早い。私の望むことを分かってくれ、そのように取り計らってくれる」と絶賛し、他の奴隷を送らないようサファイラに頼む。(815) さらに、レイチェルもナンシーを「洗練されていてとても可愛く、針仕事にも部屋の仕事にも熟練した」少女だと見なしている。(914) すなわち、ナンシーがもっとも能力を発揮できるのは domesticity の領域である。このように、ナンシーの性格や能力は、当時の因

習的な女性性と完全に合致している。(それゆえ、マーティンとの関係は因習的な seduction novel のプロットに難なく適合するのである)。自らが持てない性格や能力、役割を担っているナンシーは、サファイラにとって脅威である。とりわけ、ヘンリーとの関係についてはそうであり、ヘンリーとナンシーとの関係を疑い始めると、ナンシーは現実的な脅威となる。もともと奴隷主人という意識が希薄なヘンリーが、ナンシーとの会話で優しく話しかけている場面を見て怒り、邪推しはじめ、ナンシーに体罰まで振るうようになる。ヘンリーにとってナンシーは、歪曲され理想化された、汚れない子供のようなイメージにすぎないことを見抜けなくなっている。こうして、「女性性」の希薄なサファイラと、「女性性」を体現するナンシーは、サファイラの中で競合関係になるのである²¹。

クレインの「怪物」では脅威である対象ヘンリーに、作者が火事というプロット上の暴力を加えたが、『サファイラと奴隷娘』でキャザーは二重の暴力を用意する。一つは登場人物による暴力であり、もう一つは作者による、クレインと同様のプロット上の暴力である。登場人物による暴力とは、甥マーティンを使ってナンシーをレイプさせようというサファイラの策略である。これは、トニ・モリソンの指摘どおり、夫ヘンリーの関心をナンシーからすべて自分に向けさせるためである²²。そして、レイプこそ、「怪物」で火事によって暗示されているリンチと同じく、同時代のアフリカ系アメリカ人作家ポーリーン・ホプキンス (Pauline Hopkins) が主著『対立する勢力』(Contending Forces: A Romance Illustrative of Negro Life North and South, 1900) で、黒人への二大暴力として痛烈に告発していたものである²³。キャザーの小説は南北戦争前の時代を扱う、回顧的な作品であるが、同時代の出来事と密接に関わっていることが分かる。しかし、実際にレイプを描くことはおそらく、『サファイラと奴隷娘』という牧歌的でノスタルジックな地方色文学には似合わない。それゆえ、作者は別の方法で、脅威であるナンシーを排除する。それが、北部への逃亡という筋書きである。この筋書きはもちろん、物語内ではナンシーにとって救いとなる。マーティンによるレイプの

危機から逃れることができ、かつ奴隷から自由の身になれるからである。

しかし、最終の第9編「ナンシーの帰還」を見ると、ナンシーが本当に「自由」になったのか疑問である。最終編は、ナンシーの逃亡から25年後、ナンシーがカナダから「故郷」に戻ってくる場面である。奴隷制は終わり、サファイラもヘンリーも既に他界している。しかし、ナンシーは母親のティルと再会を果たすことができる。その再会の場面を5歳のときに目撃した、おそらくサファイラのひ孫と思われる語り手が回想しながら語っている。25年後のナンシーは、性的に「安全」な存在になっている。現在は44歳の中年の女性であり、既に結婚し三人の子供を持つ母親でもある。さらに、結婚相手には白人男性でなく、「半分スコットランド系で、半分インディアン」の男性を選んでいる。(933) つまり、かつてのように競合相手として、白人女性の脅威となることはもはやない。

さらに、人種階層的にも完璧に「安全」な存在となっている。最終編で語り手によって繰り返し強調されるのが、ナンシーが有能な「家政婦」(housekeeper) になっているということである。モントリオールでナンシーはいま、裕福な白人家庭で家政婦となっており、夫もそこで雇われる庭園管理者 (gardener) である。ナンシーは「女主人 (mistress)」のことを「奥様 (Madam)」と呼び、「男主人 (master)」のことを「ケンウッド大佐」と敬称で呼んでいる。(933) そして、ティルに対し、自分の家族の話の他に、ケンウッド家で召使たちが仕事をどう分担しているかなども語る。すると、ティルは話を遮り、「偶像を見るような誇り」を抱いて娘の顔を見上げ、「マツチェム夫人とまったく同じような話し方をする」と絶賛し、「もっと話を聞きたい」とせがむ。(934) マツチェム夫人とは、ティルが敬愛する師匠であり、家内奴隷としてのマナーを叩き込んでくれた憧れの人である。つまり、ナンシーはティルが理想とするような完璧な召使になったことを示している。

そして、ナンシーは実際に、滞在中語り手の家にしばしば来ると、旅行かばんから「縫い物の道具や洗い立てのエプロン」を取り出し、どんな家

事 (housework) でも手伝わせてほしいと強くせがむ。(934) ティルとナンシーは昼食後、二人で腰を下ろし、「縫い物や編み物の道具」を旅行かばんから取り出し、昔のことについて語り合う。その傍で「つぎはぎ細工を縫い」ながら、二人の会話を聞いているのが5歳の語り手である。(935) こうしたナンシーの様子は、彼女が何よりも、家事労働を進んで行う有能な家内召使になっていることを示している。そして、この姿は明らかに、南北戦争前の家内奴隷とも重なっている。ナンシーはケンウッド家の主人のことを、奴隷主人のように呼び、かつティルはナンシーを家内奴隷の理想が達成されたものと感銘を受けているからである。つまり、ナンシーは自由の身になったとしても、事実上は、白人を主人として完璧に仕える、奴隷のままになっていることが分かるのである。

一方、ナンシーが北部へ逃亡した結果、サファイラはどうなったのだろうか。逃亡を手助けした娘レイチェルとは絶交し、ますます母親としての役割から疎外されたようにみえる。しかし、ナンシーという二人の軋轢の種はなくなったともいえる。さらに、その後の展開で、レイチェルの二人の娘がジフテリアに罹ると、サファイラは絶縁状態をかなぐり捨て、迅速に的確に奴隷たちに命令する。「私の二人の孫娘が病気なのだ」と言って奴隷の一人を優秀な医師に送り、夫ヘンリーがレイチェル家にいるが「男の人は細かいことまで気づかない」と言い、寝具を持ってレイチェルの所へ行き、必要なものを逃さず見てきてほしい、子供たちの様子も見て報告するようにと、最も信頼するティルを送りつける。(919) この結果、レイチェルは娘の一人は失うが、もう一人は生き延びさせることができる。そして、やがて母親と和解することになる。つまり、この出来事を通じてサファイラは、母親としての役割、祖母としての役割を回復するのである。

レイチェルの家から戻ったヘンリーが、孫娘の一人の死を告げる場面で、サファイラにはそれまでにない変化が見られる。ヘンリーの手を握り締め、「こうしたことは私たちの計らいを超えたことなのよ」と言って慰める。(924) そして、「手が氷のように冷たい」と案じ、ヘンリーにすぐラム酒を飲ませてやる。(925) その後、考え事

にふけると、レイチェルと生き残った孫娘メアリ（Mary）をこちらに呼んで冬の間に一緒に過ごそうと提案する。「孫娘に合えないと自分も寂しい」と言い、自分に何か起こったとき、ヘンリーにとってここもとても寂しくなると夫を気遣う。（925） また、レイチェルとティルはうまくやっていけると言い、自分がいなくなった後、家を取り仕切る主人役はレイチェルに譲ることを仄めかす。（925） この言葉に、先述したようにヘンリーは心打たれ、サファイラの前に跪いて涙を流すのである。このクライマックスの場面で、サファイラは孫娘の死に際して宗教的となり、夫の体や今後を気遣う良き妻となり、孫娘を慕う良き祖母となり、娘の将来を考える良き母親となっている。そして、自分がずっと望んでいた、夫の愛情を一気に取り戻すことにも成功する。つまり、作者キャザーが、二人の軋轢の種であった脅威ナンシーを国外へ放逐し、孫の病死といった唐突な展開を組み込んだことで、サファイラの欲望を達成させ、その地位を奪回させるのである。

このことは、クレインの「怪物」で主人公がヘンリーからトレスコットに移行したことと共通している。孫娘の病死の前までは、マーティンとナンシーとの関係や、レイチェルのナンシー逃亡の手助けのドラマなどが続き、サファイラは見えない存在となっていた（ただ、裏でマーティンを操る暗黒の人物として以外は）。ところが、ナンシーの消失や孫娘の病死によって、第8編の最後で再び主人公として前景化し、ヘンリーとの関係も回復する。さらに興味深いことに、既に他界しているはずの最終編でも、似たようなことが起こっている。ここはティルとナンシーの「感動的な」母娘の再会が中心となっているのだが、奇妙なことに、物語の最後に再びサファイラが前景化する。

このサファイラの「主人公化」は、ティルの語りを通してなされている。奴隷解放後も、ティルは最後まで主人に忠実な、完璧な奴隷であり続け、二人の主人の髪の毛を形見として大切に保管し、白人少女（語り手）にはサファイラの晩年の様子を好んで語り聞かせる。医者によると、水腫に罹ってこれほど生き延びる人はいなかったこと、それはサファイラの心臓（心）が強かったためであること、寝床にいることしかできなくなっても不平

一つ言わなかったこと、服を着替えることさえ辛くなっていたのに決して短気を起こさなかったことなどを語る。また、レイチェルとは和解を果たし、一緒に紅茶を飲みながら昔話を語り合っていたこと、また孫のメアリは祖母サファイラが大好きになったことも語る。それでも、紅茶の時間の後はサファイラは独りになることを好み、最後まで一人で、苦しみがあったとしても誰を呼ぶこともなく背筋を伸ばして椅子に座ったまま逝ったことを述べ、ティルは外で天使がサファイラを待っていて、一緒に旅立ったのではないかと感想を付け加えている。（937-939） この語りには主人サファイラへのティルの敬慕が詰まっており、作品の最後で、ティルを通じて読者に、晩年のサファイラの精神的強さ（克己心）や母親・祖母としての愛情深さ、南部淑女としての誇り、宗教的に欠陥のない亡くなり方が強く印象づけられる。ティルの敬愛は、以前の場面でヘンリーが見せたサファイラへの敬愛と重なっており、サファイラは二重に理想化されるのである。

しかし一方で、黒人登場人物は周縁化され、都合のいい「引き立て役」となる。奇妙なことに、帰還したナンシーは、ティルから「何にも増して、かつての主人たちの晩年の話を知りたがって」いる。（936） このことは、ナンシーがいまだにヘンリーとサファイラを主人として慕っていることを示している。さらに、サファイラを最後に賛美するのがティルであることは、この忠実な奴隷が聞き手（語り手だけでなく読者も含む）に対し、サファイラの理想化に利用されていることを示している。モリソンはティルについて、「奴隷所有者のイデオロギーを補強するためだけに語ることを許されている」と鋭く指摘している²⁴。つまり、ナンシーとティルはテキストのイデオロギー機能の強化に利用されているのであり、結果としてレイプという耐え難い暴力が最終的には正当化されているのである。同時に物語の中では、ティルの語る相手がサファイラのひ孫であることから、黒人という媒介を通して、南部白人淑女の伝統が継承されていることが分かる。

作品の娯楽性・芸術性という観点から見ると、最終章のティルとナンシーとの再会は、サファイラとレイチェルとの和解と並行し、母娘関係とい

う作品のテーマに役立っている。また、ノスタルジックで牧歌的な、古き南部を讃える地方色小説の happy ending にもうまく貢献している。しかし、それ以上に重要なことは、この二人の黒人登場人物が、まさに黒人への暴力を正当化するイデオロギーの強化と、そのイデオロギーを継承する手段として利用されているということなのである。

4. おわりに

これまで見てきたように、人種というテーマにおいて「怪物」と『サファイラと奴隷娘』にはいくつかの共通点がある。両テキストとも、同性間の競合という文脈で、黒人登場人物が白人主人公を脅かす存在となっている。トレスコットにとってはヘンリーがそうであり、サファイラにとってはナンシーがそうである。そして、その脅威を取り除くために、作者がプロット上の暴力を振るうという点でも共通している。クレインは火事という突発的事件（集団リンチの隠喩）を入れることで、ヘンリーから父性、男性性、知性、そして人間性そのものを奪いとる。キャザーはまず白人主人公の計略によってナンシーを精神的に追い詰め、さらに、北部への逃亡という筋書きを入れることで国外へと排除する。その結果、両テキストとも、脅威であった黒人登場人物は「安全」な存在になり、人種による階層制度を侵犯する危険性はもはやなくなる。こうした結末は、黒人を安全な場所や地位に封じ込めておくという、人種隔離を正当化するものである。それだけでなく、黒人は白人主人公の引き立て役として周縁化され、作品上のテーマにも貢献する道具として利用されている。こうして、白人登場人物や作者による暴力は正当化されることになるのである。

しかし、両テキストには相違点も見られる。それは、プロット上では happy ending と unhappy ending の違いとして顕著に表れている。『サファイラと奴隷娘』は牧歌的でノスタルジックな、完璧な happy ending の物語である。サファイラとレイチェル、ティルとナンシーという母娘関係や、サファイラとヘンリーの夫婦関係、サファイラとティルの主従関係など、すべての人間関係は融和し、読者に安穏な印象を与える。さらに、ティルやナンシーという黒人と、子供時代の白人の語り

手との関係も懐かしい思い出として、良好なものに描かれている。それに対して、「怪物」では、人間関係の軋轢だけが残る。町の有力者とトレスコットは対立している。町の人々はトレスコット夫妻を村八分にし、精神的に追い詰めている。ヘンリーは行き場所がなく、ただトレスコット家に隔離されている。ジミーはもはやヘンリーを「仲良し」とは思っておらず、「怪物」として興味本位に接しているだけである。この結末は出口の見えない、暗い読後感を読者に与えている。

二つのテキストのこうした違いはどこから来ているだろうか。作者による意図の違い、すなわち、キャザーは古き良き南部を賛美するという目的を持っているのに対し、クレインは偏狭な田舎町を諷刺するというそれを持っているという違いがあるのはもちろんである。しかし、テキスト内で読み取れる重要な点は、黒人の人物造型の違いである。『サファイラと奴隷娘』の最後でナンシーは完全に「安全」な存在となっている。それに対し、「怪物」でのヘンリーは完全に「安全」な存在とはいえない。いまだ町内に残り、怪物として人々を脅かし、トレスコットの苦悩の種ともなっている。

キャザーのテキストにおいて興味深いのは、ナンシーが5歳時の語り手によって神秘化されていることである。語り手にとってナンシーは、物心つく頃から母親の子守唄に登場する「若く、黄金の皮膚をした」「敏捷な」少女である。(931-932) 語り手は自分の中で伝説化したナンシーを一目見るのを楽しみにしている。そして、実際にティルとナンシーとの再会の場面を見ると、どちらも一言も言葉を発せず抱き合う様子を見て、「聖書に描かれている絵にあるような、何か神聖なものが、その再会にはあった」と宗教的に神秘化している。(932) そして、ティルとナンシーが会話している傍にしながら、「質問を差し挟まないことがいちばん良いことが分かった。なぜなら、そうすると魔法が解けてしまうようだったから」と回想している。(935) こうして、ティルとナンシーという黒人の母娘は、子供時代の語り手の目によって非現実的に、宗教画のように描かれている。かつ、彼らは今でもかつての白人主人を慕っており、ナンシーはカナダで現在の主人に忠実に仕え、

ティルは子供である語り手にまで忠実に仕えている。彼らは決して白人を脅かすことはない、自分たちの分限を守る存在のまま、神秘的・伝説的存在となって白人を和ませ楽しませる人物になっているのである²⁵。

「怪物」において、ナンシーと同様にヘンリーにも伝説化される契機がある。それは、火事を報じる朝刊が誤って、ヘンリーが死んだと報じたときである。ヘンリーが白人の子供を救うために自らを犠牲にして亡くなった「聖人」として、町の大人にも子供にも畏敬される。(211) ところが、その後、ヘンリーが死の世界から蘇り、再び現実の存在になった途端、火傷で顔を失った怪物として現実的な恐怖となるのである。このことは、作者クレインがキャザーと異なり、ヘンリーを伝説化・神秘化するプロットを拒絶したことを意味している。

そして、こうした展開が作品の *unhappy ending* を生み出していることは明らかである。ヘンリーはナンシーと異なり、異質なものとして疎外されながらも、(白人にとって) 快い神秘的・娯楽的存在として安全な存在とはならず、死から蘇った幽霊のような「怪物」として人々を脅かし続ける。こうしたヘンリーの終わらない脅威は、クレイン自身の恐怖を暗示していると考えられる。それは黒人そのものへの恐怖であり、リンチという暴力を加えても完全に封じ込められないのではないかという恐れでもある。そこには、人種隔離という制度はいずれ崩壊するのではないかという予感も含まれていると考えられる。

また、町の人々の圧力に屈せず、ヘンリーを隔離施設に入れようとしないうtrescottを描くことで、人種隔離制度への *ambivalence* を表出しているように読める。それは、火事の場面で見られた、ヘンリーの「人種化」と「人間化」の間でのクレインの *ambivalence* にも通じるものである。息子を救ってくれたヘンリーを、あくまで「怪物」として隔離できないtrescottの葛藤には、ある程度の読者の共感も期待できるはずである。クレインはtrescottの苦悩を通じ、意識的にか無意識的にか、人種差別や人種隔離への疑問や良心の呵責などを、解決できない問題として表出していると考えられる。

キャザーにはこのような葛藤は一切見られない。黒人は完全に封じ込められた、安全で従順な「奴隷」のままである。『サファイラと奴隷娘』が1940年代に出されたことを考えると、キャザーの時代錯誤性、退行性、鈍感さには驚くべきものがある。それは、あくまで過去の世界に生きようとする、キャザーの頑固な保守性を強く印象づけるものである。それに対し、自然主義作家でジャーナリストとしてスラム街など今日的な問題を扱ってきたクレインにとって、人種問題はステレオタイプだけで片付けられない現実的なものであり、白人である自身の恐怖や葛藤を屈折した形で表現しながら真摯に向き合っているのである。

¹ 本稿では当時の慣習にならって、人種、黒人、白人という表記を使用するが、近代に社会的に構築された疑似科学のカテゴリーであることを前提にしている。

² Wolford, 47-48.

³ 久我, 410-413.

⁴ Cooley, 13-14.

⁵ Cleman, 122-126.

⁶ Cleman, 128-131; McCurrey, 52-65.

⁷ McMurrey, 56-59; Marshall, 213, 221.

⁸ Cleman, 128-129.

⁹ McCurrey, 65.

¹⁰ Marshall, 220-222.

¹¹ Crane, 191. 以下、「怪物」からの引用はこの版により、頁番号を末尾に括弧で示す。

¹² 何人かの批評家はヘンリーがジミーの「父親代理」になっていると指摘している。Church, 379-380; Cleman, 126; Nagel, 55.

¹³ Cleman, 126; Marshall, 213, 221.

¹⁴ Marshall, 213.

¹⁵ Cleman, 128-129; Marshall, 222; McMurrey, 64-65.

¹⁶ Cleman, 129; Cooley, 13; Mitchell, 184-185.

¹⁷ クレマンは火事後のヘンリーの描写について、「以前の姿を固定化しグロテスク化したものである」と興味深い指摘をしている。Cleman, 129.

¹⁸ Urgo, 35.

¹⁹ Cather, 926. 以下、『サファイラと奴隷娘』からの引用はこの版により、頁番号を末尾に括弧で示す。

²⁰ トニ・モリソンは、サファイラが自らの肉体の無力さ(powerlessness)から逃避するため、他の黒人(ナンシー)の肉体に権力(power)を行使し白人としての自尊心を保とうとしていると興味深い指摘をしている。Morrison, 26.

²¹ 『サファイラと奴隷娘』の創作過程を詳細に分析したセーラ・クレアの論考から、キャザーが徐々にサファイラを男性化し、ナンシーを女性化していることが読み取れ興味深い。Clere, 446-454.

²² Morrison, 19, 25.

²³ 第14章のライカーガス・ソウヤー(Lycurgus Sawyer)による演説の場面を参照。Hopkins, 254-262.

²⁴ Morrison, 28.

²⁵ 最終章でのナンシーの神秘化は、同じ章でのサファイラの描写と対照的である。サファイラは長年忠実に仕えてきたティルの語りによって、晩年の様子が具体化され、性格も明らかにされる。それに対し、ナンシーは子供時代に一度しか会っていない語り手によって非現実的な、子守唄の中の人物のまま表層が描かれるだけである。

引用文献

Cather, Willa. *Later Novels*. Ed. Sharon O'Brien. New York: the Library of America, 1990.

Church, Joseph. "The Black Man's Part in Crane's Monster." *American Imago: Studies in Psychoanalysis and Culture* 45.4 (1988): 375-388.

Cleman, John. "Blunders of Virtue: The Problem of Race in Stephen Crane's 'The Monster.'" *American Literary Realism* 34.2 (2002): 119-134.

Clere, Sarah. "Cather's Editorial Shaping of *Sapphira and the Slave Girl*." *Studies in the Novel*. 45.3 (2013): 442-459.

Cooley, John R. "'The Monster'—Stephen Crane's 'Invisible Man.'" *Markman Review* 5 (1975): 10-14.

Crane, Stephen. *Great Short Works of Stephen Crane*. New York: HarperCollins, 2004.

Hopkins, Pauline E. *Contending Forces: A Romance Illustrative of Negro Life North and South*. New York: Oxford University Press, 1988.

Marshall, Elaine. "Crane's 'The Monster' Seen in the Light of Robert Lewis's Lynching." *Nineteenth-Century Literature* 51.2 (1996): 205-224.

McMurray, Price. "Disabling Fictions: Race, History, and Ideology in Crane's 'The Monster.'" *Studies in American Fiction* 26.1 (1998): 51-72.

Mitchell, Lee Clark. "Face, Race, and Disfiguration in Stephen Crane's 'The Monster.'" *Critical Inquiry* 17.1 (1990): 174-192.

Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. New York: Vintage Books, 1990.

Nagel, James. "The Significance of Stephen Crane's 'The Monster,'" *American Literary Realism* 31.3 (1999): 48-57.

Urgo, Joseph R. "'Dock Burs in Yo' Pants': Reading

Cather through *Sapphira and the Slave Girl*." *Willa Cather's Southern Connections: New Essays on Cather and the South*. Ed. Ann Romines. Charlottesville, VA: University Press of Virginia, 2000. 24-37.

Wolford, Chester L. *Stephen Crane: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne, 1989.

久我俊二『スティーヴン・クレインの「全」作品解説』（慧文社、2015年）

（本稿は平成28～30年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「共感の反社会性と「いじめ」、偏見、紛争：異分野融合研究による教育モデルの提言」（課題番号16K13456）（研究代表者：中村真）の研究成果の一部である。）

Race and Violence in Stephen Crane's 'The Monster'

YONEYAMA Masafumi

Abstract

This paper explores how Stephen Crane presents African Americans in his 'The Monster' (1898) by comparing this short novel with Willa Cather's *Sapphira and the Slave Girl* (1940). In 'The Monster,' Henry Johnson, an African American, is presented as an imminent threat to European American society because of his upward mobility and marked masculinity. Crane has this "dangerous" character maimed by a fire, a symbol of lynching, in his plot. Henry becomes a disfigured and faceless "monster," a grotesque version of an African American stereotype, devoid of humanity. Likewise, in *Sapphira and the Slave Girl*, Nancy, a slave girl, is presented as a threat to Sapphira, her mistress, in relation to Sapphira's husband. Cather puts Nancy in danger of being raped and makes her run away from the plantation to Canada. In this way, Cather removes this threat from the U.S. and lets Sapphira regain her central place at home. Both Crane and Cather attempt to contain "dangerous" African American characters in their novels in order to support racial caste and segregation. However, there is a difference between them: Crane betrays his doubt and ambivalence toward racism especially through the protagonist Dr. Trescott's opposition to Henry's segregation, whereas Cather complacently justifies racial hierarchy as the Southern tradition.

(2019 年 5 月 7 日受理)